な業績を、県内屈指のジャーナリストとしての鋭い洞察力、批判眼でとられた集大成だともいえる。

本書の構成は、則武三雄の詩・ほか、広部英一の詩・ほか、北美三十周年記念展・ほか、など計十六の分野に類別して整理編集し、読者の便宜をはかっている。

ところで小林氏の文化論として興味ぶかいのは、「大都市に中央の文化があって、それが傾斜を持って地方に流れ、そこで融和して地方文化が成立するという考え方もあるが、もともと〝地方文化〟などというものは存在しなくて、地方にこそ真の文化が存在し得るのである。（後略）」（「地方文化と風土・ほか」（一七八ページ））と述べるが、たしかに八十年代の「地方」を考える場合にも、重要な提言だと考えたい。何と言っても「地方」の個性豊かな「ふるさとづくり」が地域住民により積極的かつ主体的に推進されてこそ、名実ともの「文化」が生成されるのではなかろうか。

著者自身が「あとがき」で、「抽象的な文化論ではなく、現場からの文化レポート」と銘打つが、こうした内容のものは、県下では最初の試みでもあり、本県の諸文化の具体的動向を理解するうえで、きわめて貴重な業績として高く評価すべきであろう。

なお小林氏には、これまで『一揆と飢饉と漂流と』・越前豆本『韃靼漂流記』などの著書がある。

（フェニックス出版刊　二七五ページ　一、二〇〇円）

小林　巌著

評論・福井の文化

三上一夫

本書は、福井新聞論説副委員長をつとめる小林巌氏が、昭和五十一年春以降福井新聞学芸欄に「文化ノート」のコラムで、約四年間二百回にわたり「巌」という署名入りで、執筆掲載したものを中心としている。県下で約六百名におよぶ文学・歴史・民俗・芸術など文化面の多彩